



平成21年度農業農村整備計画セミナー講演要旨

「農村地域資源の保全と再生」～住民と地域組織へのソフトアプローチ～



星野 敏
京都大学大学院農学研究科教授

一、はじめに

農業農村整備事業が質的に変化しつつあります。従来は開発対象が生産生活基盤等のハードウェアの整備でしたが、今日では開発対象が住民や組織に移りつつあります。「農村地域資源の保全と再生」についても、ハード整備の重要性が相対的に縮小し、資源管理主体をいかに再編強化していくかという、ソフト面（非ハード面）が増加してきました。このようなソフト化の流れの中で、たとえば「農地・水・環境保全向上対策」等の施策が登場してきました。このため地域主体の育成や支援にかかわる新しい技術が求められています。ハード整備技術は、当然のことながら、自然の物理的なメカニズムをコントロールする技術が主役でありました。けれども、ソフト施策の場合は、開発対象が住民組織であ

り、そこに作用するメカニズムは当然異なっています。農業農村工学に携わる者は、地域主体の育成と支援にかかわる新しいソフト技術を、現場の中でいろいろと工夫し創出している段階にあるかと思えます。そういった試行錯誤の中では経験から学習していくことが重要になります。このようなソフト技術に関連するキーワードとして、私は、地域づくりの意欲、ソーシャル・キャピタル、そして地域ナレッジの保全に注目しています。

二、地域づくりにおける住民意欲の重要性と意欲を規定する要因

「農村地域資源の保全と再生」は、そこに住む住民の意欲に大きく依存しています。神戸市北区のある集落における里づくりの事例を用い、地域づくりに対する住民の意欲が、地

域活性化計画の成否に及ぼす影響を明らかにするとともに、住民の意欲を規定する要因について検証してみました。

この分析の結果、地域づくりに対する住民の関心・参加意欲の水準が、活性化項目（地区計画の内容）に対する評価を大きく左右しています。この結果は、良い計画を作成することは大事なことですが、それと同等以上に、住民の意欲をそういったプロセスの中で高めていくというのが成否を左右する重要な要因であるということ、強く示唆しています。そして、地域づくりの意欲を左右する要因として、集落活動への関わり合いの程度と地域づくり事業に対する理解度があり、2つの要因はそれぞれ違った経緯で意欲形成に貢献をしているということがわかりました。

さらに、地域づくりへの意欲や集

落との関わり合いの程度は、その人の信頼に関わる特性と一定の関係があることが推察されました。この信頼尺度は、ソーシャル・キャピタルの構成要素でもあるので、地域づくりの意欲水準は集落のソーシャル・キャピタルの水準とも、ある程度関連性があるのではないかとということが示唆されました。

三、地域発展力とソーシャル・キャピタル

次に地域発展力とソーシャル・キャピタル（以下SCと略称）についてお話しします。中山間地域等直接支払制度を導入した地区の事例分析で、SCと地域発展力との関連性を検証してみたところ、同じ事業を同じ時期に実施しても、効果の大きさが発現の仕方が異なっていることが明らかにになりました。このような「地域差」は現場におられる方は良くご存じのことだと思います。地域の発展力の差は、かなり昔からあったと思います。

R.パットナム氏は、SCを『人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる「信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク」といった社会組織の特性』と定義付けています。SC水準が高ければ、人々は互いに信頼して協力



講演中の星野講師

し合いながら、集合行動のジレンマを克服して、よりよい解決策を見いだしやすい。SC水準を高めることが、非常に大事な政策目標であることとを指摘しています。

そして、直接支払制度の運用パフォーマンスとSCに関する実証的研究にもどります。直接支払制度の交付金は使途が自由裁量に任されているので、地域の力量の差が交付金の運用パフォーマンスの差に素直に反映されるのではないかとという仮説をおきました。そして、地域のSC水準と地域活性化がどういうふうに関連しているかを、実際のデータで明らかにしてみました。兵庫県六粟市内の5地区でアンケート調査によってSC水準を調査して、直接支払いの運用パフォーマンスとの対

比を見てみますと一定の関連性が得られました。このことから、SC水準が地域の発展力を規定する要因であることが推察されます。

今回の分析ではどの地区も適正に農地が保全・管理されていたので、資源管理という側面から見ますと、SCの違いというのはあまり出てきませんでしたが、違いが出てきたのは地域づくりの活動、プラスアルファの地域づくりの活動水準に、SC水準の違いというのが反映されていたように思われます。農地をはじめとする地域資源は、集落によって組織的に維持されている部分がありますので、今後状況が厳しくなった場合には、SC水準によって、農地保全にも差が生じる可能性が予想されます。

四、地域資源の保全とナレッジマネジメントの必要性

「地域ナレッジ」(地域に関わる知識)とは、作物と対話のできる営農技術、地域資源管理のノウハウ、生活の知識と伝統、集落等の意思形成の方法等であり、その大部分は、世代を超えて蓄積されてきた、マニュアル化できない暗黙知(言葉では表現しにくく、他の人に伝えることが困難な知識。経験を介して獲得される知識で、熟練者の勘やノウハウに

相当する)です。地域ナレッジは、それ自体が地域資源の一部であると同時に、他の地域資源の保全に不可欠なものです。持続的な地域発展のために地域ナレッジの保全と、それを活用し得る人材、組織の育成といったものが求められています。農村計画の視点から見ても、ナレッジマネジメントの視点を導入しつつ、

こういったノウハウをうまく次の世代あるいは違った地域に移転する、そういう計画論の確立が必要とされています。農村地域では、今日でもそういった暗黙知に依存して生産が営まれ、生活が成り立っている部分が少ないからあるということですが、現実には、高齢者の方が地域ナレッジを豊かに保有していますが、その知恵と知識のバトンを次の世代にうまく受け継ぐことができないままに高齢者の知恵が急速に失われようとしています。

例えば、ため池の管理に関するナレッジもそうです。兵庫県稲美町で調査した結果によりますと、ため池の操作を誤りますと、人命に関わる非常に大きな被害が発生する危険があるそうです。これまでため池の管理と水門操作の知恵を持っているのは、ため池の水利組織の責任者の方ですが、その方が、一子相伝ではないですけれども、自分の後継者を選

んで自分の全知識をその方に与えて、自分と完全に入れ替わるようになって、初めてその役を彼に譲るといって、そういう形で受け継がれているところが今でもあります。

今のところ、地域の中に経験豊かな高齢者がかるうじていらつしやるということ、細々とつながっているわけですけれども、これからはそういう方がいなくなるという中で、如何にして地域ナレッジを保全していくか、あるいは次世代に伝えていくかが地域資源保全のために大事な課題になってくると思います。

五、おわりに

本日お話しした地域づくりの意欲の向上、ソーシャル・キャピタルの醸成、そして地域ナレッジの保全と継承はいずれも相互に深く関連しています。事業のタイプがソフトな部分にソフトし、地域の主体や組織が開発対象になりました。それに伴い、ソフトな技術の開発が求められています。われわれはそのような技術の蓄積が十分ではありません。当面は現場での手探りの中でよい方法を見つけていく必要がありますし、みんなで学び合いながら、この体系をつくり上げていく必要があると思います。